

長浜市鴨田遺跡  
発掘調査概要

1972.3

滋賀県教育委員会

## 序

産業の発達にともなう交通量の増加は、滋賀県下だけに限らず、全国的な現象であるが、これに対処するための事業が各地で急ぎ進められている。長浜市においても市内を縦断する国道8号線が年を追うごとに交通量を増し、現在では交通停滞が日常茶飯事となっている。そのため建設省によりバイパスの設置が計画され、日下工事が進められつつあるが、この路線上には鴨田遺跡をはじめ数ヶ所の遺跡が存在するため、当課では去る昭和45年度から3ヶ年計画でそれらの遺跡の発掘調査を実施している。

本書はそうしたもののうち、鴨田遺跡の発掘調査の途中経過並びに結果の概要報告書である。今回の調査によって色々と興味深い事実が確認されたが、それらについては後日刊行予定の報告書に譲らなければならない。本書によってその輪郭を理解していただければ幸いである。

末筆ながら調査にご協力下さった調査員、調査補助員、作業員ならびに関係各位に深甚なる謝意を表する次第である。

文化財保護課長 井 上 佐 助

## 例 言

- 1 本書は、国道8号線長浜バイパス建設工事にともなう関係遺跡の一つ、長浜市鴨田遺跡の発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査は、建設省近畿地方建設局より委託されて、滋賀県教育委員会が主体となり、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施し、本委員会文化財保護課技師中谷雅治、主事川那辺正雄を担当者として、昭和46年6月から10ヶ月間の予定で目下実施中である。
- 3 発掘調査には立命館大学大学院生、佛教大学大学院生を調査員に、そして愛泉女子短期大学、京都教育大学学生猪氏を調査補助員に迎えることができたほかに、地元の方々より多くの協力を得た。
- 4 本書は昭和47年1月末口現在の結果の概要を収載するものであるが、調査は3月まで実施の予定であり、最終的な成果、所見は後日に刊行予定の報告書にゆずりたい。
- 5 本書は「調査までの経過」を川那辺正雄が、「位置と環境」・「調査の概要」・「遺構」・「遺物」・「むすび」を中谷雅治が執筆した。



国道8号線長浜バイパス予定路線

#### 調査までの経過

滋賀県草津市と福井県敦賀市を結ぶ国道8号線は、近畿地方と北陸、若狭地方を結ぶ唯一の交通路として、以前から利用度の高いものであったが、自動車輸送の増加に伴って、この国道によって縦断される長浜市では、ここを通過する自動車の量が日増しに膨脹し、早くも昭和40年頃には、長浜市高田を中心に交通機関の停滯が恒常化するようになった。このことを憂慮した長浜市は、この8号線に代る道路の設置を建設省に要望する傍ら、長浜市神照町から同市田村町までの延長10,627mの用地を確保することによって、この新道路建設の具体化を計った。

こうした計画の具体化に伴って、本委員会は、予定路線上の遺跡の分布調査を昭和43年度の国庫補助事業として実施した結果、散布地を含む8遺跡が線内に含まれることを確認したため、これらの保存を建設省に要望した。しかしすでに長浜市によって先行取得された予定路線を変更することは困難をきわめ、結局これらは記録保存の止むなきにいたった。

これら8遺跡の発掘調査は、建設省近畿地方建設局滋賀国道工事事務所より滋賀県教育



鴨田遺跡付近の景観

委員会に委託されたため、本委員会では昭和45年度から3ヶ年計画でもって実施することにして、初年度に当たる昭和45年度には、8遺跡のうち長浜市南方、南方東、川崎の3遺跡の発掘調査を実施したのに続いて、昭和46年度には同市川崎南、勝町、鴨田の3遺跡を調査するにいたった。

鴨田遺跡を除いた他の5遺跡の発掘調査は、大江今氏を団長とする『長浜バイパス北方遺跡調査団』に、そして鴨田遺跡の発掘調査は、『財団法人 滋賀県文化財保護協会（理事長 野崎貫一）』に再委託して実施した。

鴨田遺跡の発掘調査は、当初昭和46年6月から10月までの5ヶ月間の予定で開始したが、予想以上に出土品が多量であったため、調査期間を翌47年3月まで延長した。

調査期間中、天候の異変等によって作業の進行に支障を来たすことも少なくなかったが、12月から2月にかけて、例年より積雪量が少なかったことは幸いであった。

## 位置と環境

鴨田遺跡は滋賀県長浜市大成亥町字南寺田・下加茂田付近に広がる、主に弥生式時代から古墳時代にかけての大集落跡である。これの所在する長浜市および隣接するびわ町・虎姫町・高月町一帯は、織田信長と浅井・朝倉連合軍との決戦場で有名な姉川の氾濫原にあたっている。姉川は伊吹山系にその源を求めることが出来るが、伊吹山系一円は頁岩・砂岩・角岩などの古生層が発達しているため、これを開析する姉川の氾濫原は砂層・粘土層が厚く堆積している。伊吹山系を南流し、坂田郡伊吹町字伊吹付近で西方に曲流する姉川は、かつては東浅井郡浅井町字今莊近くで流路を変えることが多く、ここから下流の地域に広大な氾濫原を形成したが、今では固定化されている姉川の流路とは別に、現在でも、このいわゆる湖北平野のほぼ全域にわたって、今莊に端を発した水路が網の目のようにめぐっている。

今日では長浜市を中心にして、この湖北平野の人文景観はゆるやかにも変化しつつあるが、古く古墳時代における当方は、息長氏・物部氏の勢力圏として非常に発達したので



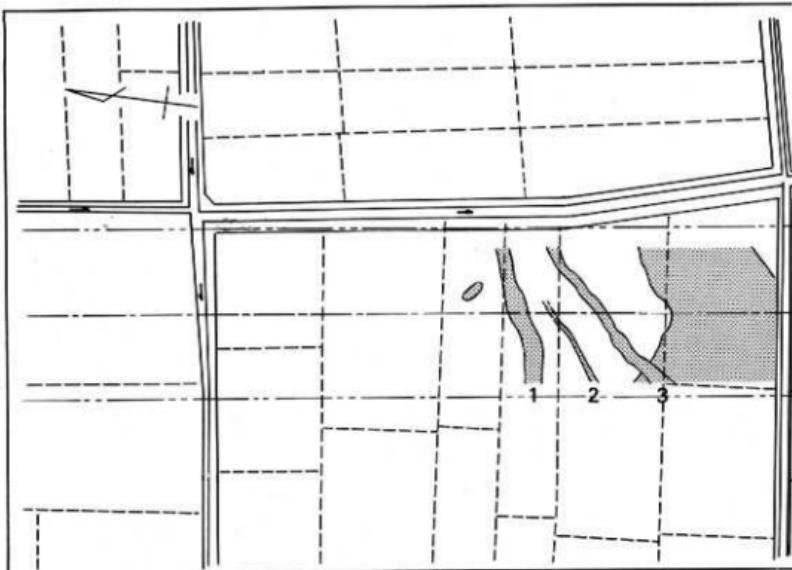
(○) 鴨田遺跡 (●) 弥生式時代遺跡 (○) 前方後円墳 (○) 鴨田遺跡付近の遺跡

ある。すなわち、主に姉川右岸は物部氏が、また左岸は息長氏がそれぞれ掌握していた。前者は伊香郡高月町、東浅井郡湖北町に点在する前方後円墳の瓢箪山古墳・長塚古墳・姫塚古墳・若宮山古墳および高月町西野山古墳群をはじめ、大小數多くの古墳群の存在によって、その盛時を偲ぶことができるし、後者においても長浜市の茶臼山古墳・長屋敷古墳・オオサキ山古墳・西塚古墳・越前塚古墳・上萬塚古墳・近江町塚ノ越古墳・山津照社古墳・人塚山古墳などの前方後円墳が、こうした過去の事実を証明している。

もっとも、古墳時代を中心に息長・物部両氏が、これほどまでの勢力を維持することができた要因は、当地が畿内と北陸とを結ぶ交通の要所であるという土地柄だけでなく、すでに弥生式時代にその基盤ができあがっていたと考えるのが妥当である。このことを傍証するかのように、当地域は滋賀県内でも最も弥生式時代の遺跡が濃密に分布している地域の一つであり、また当鶴田遺跡と何らかの関連性を有すると考えられる長浜市大辰巳遺跡のような大規模な集落跡が、今日なお工事その他の機会で数多く発見されつつある。鶴田遺跡は、こうした背景の中で大きく意義付けされるべきであろう。



発掘前の鶴田遺跡

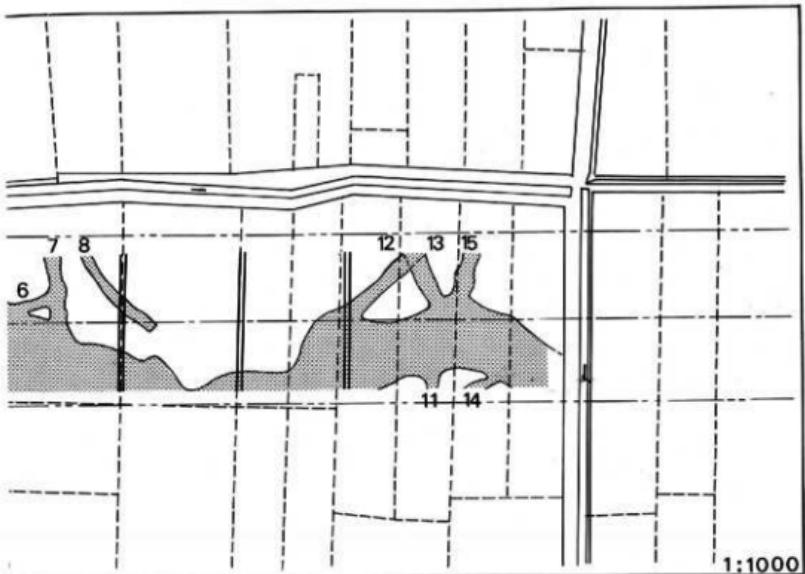


### 調査の概要

鴨田遺跡は大戌亥町の部落の東方約300m位の地点から、東北東に延びる範囲の広い遺跡であるが、今回の調査の対象となった地域は、推定範囲のはば西端部にあたり、しかも国道8号線バイパス予定路線内のみに限られた。発掘調査は昭和46年6月から昭和47年3月までの約10ヶ月間の予定で実施した。

調査は30m×200mの範囲に4m四方のグリッドを設定し、北端域の一部を除いて全面発掘を行ったが、結果的に、遺構としては2条の人工のものと思われる溝跡と、ほかに自然に形成されたと考えられる沼沢の汀線の一部およびそれに注ぎこんだ十数条の流水路を検出するのみに終った。しかしこれらの溝・沼沢地・流水路の内には数多くの弥生式土器・土師器の完形品・破片が、木器・石器などとともに包蔵されていた。またこれらと性格を異なるが、条里制遺構として坪内の地割り畦と考えられるもの一部が確認された。

調査対象地域の北方部約50mの範囲においては、耕作土の直下に砂層が続き、以下粘土層と砂層が交互に認められるだけで、遺物などの包含された層は地表下約2mにおいてな



鴨田遺跡の概略

お確認されなかつたため、この範囲では中心部および他的一部分に限つて、深さ約2mまで掘り下げて地層を観察するにとどめた。しかし一方、中央・南方域においては試掘調査の段階に、耕作土層について砂層、粘土層、黒色有機質粘土層などがあつて変化に富んでいたり、さらに耕作土層中にさえ土器破片が多数発見されたため、全面発掘を実施した。こうした部分の基本的な層序は、耕作土の直下に青白色粘土層が続くわけであるが、旧沼沢地・流水路では、内に黒色有機質粘土層・砂層が堆積し、それらに青白色粘土層が続く状態にあった。砂層は沼沢地の底部および流水路の底部にうすく堆積しているが、これの上面から砂層内部にかけて遺物の出土することが特に多い。ただ流水路は、内に砂層だけを堆積させているものと、砂層と黒色有機質粘土層を交互に堆積させているものに区別され、こうした堆積層の相違が、内に包蔵されている土器類などの年代、種類に差をもたせているものと判断されるが、各種遺物を整理中の現段階では、詳しいことは明らかでない。

一方、条里制遺構としては、約20mの間隔でもつて幅約0.8~1m程度の弥生式土器の細破片を多数含む土砂で固められた堆が数条確認された。

## 遺 構

前述したとおり、遺構としては2条の人工による溝跡と、それに自然に形成されたと判断される沼沢地および十数条の流水路しか挙げることができないが、つぎにこれらについて簡単に説明しておきたい。

溝 人工溝は2条を検出したにすぎないが（前図の8および12溝）、これらは互いに直交するように施されており、8溝が沼沢地のすぐ近くで終っているのに対し、12溝はこれに注ぎ込んだ状態であった。8溝は巾約0.8～1.0m、深さ約0.5mほどの比較的深いU字溝であって、内には大小多数の土器破片を含んだ黒褐色粘土が均一に堆積していた。一方、12溝は巾約2.5～1.5m、深さ約1.0～0.8mのやや巾の広いU字溝であって、この内には弥生式土器およびいわゆる古式土師器などの多くの完形品とともに、おびただしい量の土器片が包蔵されていた。これも8溝と同様に、以下に説明する流水路の場合とちがって砂層が内側に堆積しておらず、やや灰色を帯びた黒褐色粘土層だけで埋められていた。

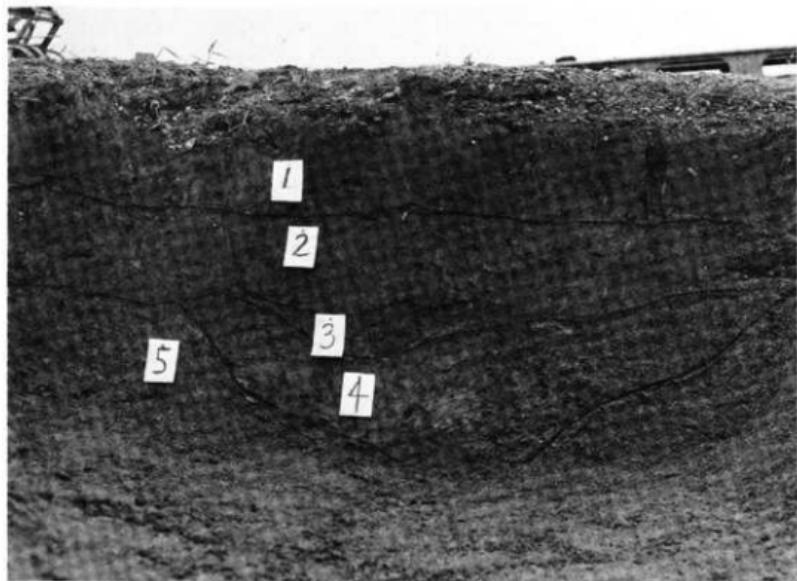
なお、こうした溝および以下に説明する流水路・沼沢地などより出土した土器などの遺



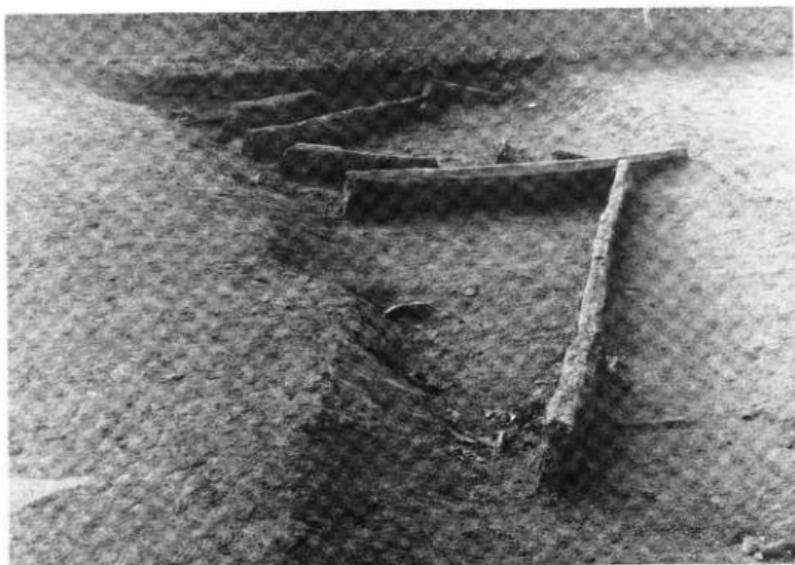
流水路と沼沢地上面

物類は、後頁で一括して説明することにしたい。

流水路　これは全部で11条を数えることができるが、これらの各々を詳細にみるとならば、それぞれに内蔵されている土器の時期、器種等に若干の変化が認められそうである。特に6頁の3溝においては若干の須恵器の混入さえ確認された。しかし大部分の流水路には弥生式時代中期からいわゆる古式土師器と呼ばれるものまでにおよび、器種もまた変化に富んでいる。これらについての詳しいことは後日刊行予定の本報告書にゆずるが、人工溝の場合と同様に大小の土器破片はもちろんのこと、完形品に近いものまでも数多く出土した。特に7溝における木材の出土状態は興味あるものであった。なおこれらの流水路のうち1～5溝は同一の流向を示し、それらは姫川が伊吹山系を出る今莊付近より流れ出て、この地に至っていることと考えられる。ただこれらのうち4・5溝は3溝とともに以下に述べる沼沢地を開拓した状態にあるため、年代はややさがるものであるが、特に4・5溝から頗著な遺物の出土をみなかったために、詳しいことは明らかでない。また2溝はきわめて浅いため、上流部はすでに耕作によって削られていた。流水路における堆積土は、主とし



3溝の断面

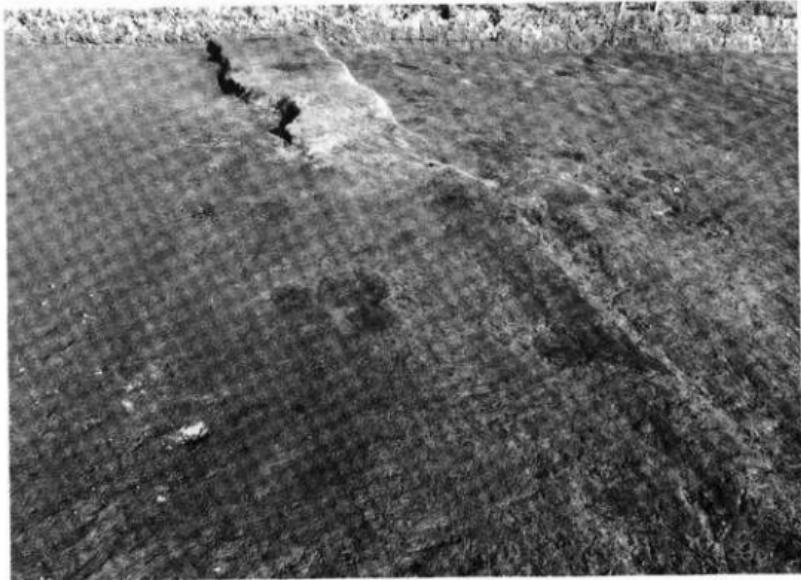


7 汎における木材の出土状態

て粗粒砂であるが、流水路によっては砂層とともに黒色有機質粘土層および灰色粘土層をうすく数重に堆積しているものや、同じ砂層といつても若干その質に変化のある事実が観察された。

沼沢地 これは最深部で地表下約2.0mをはかり、かなり深いものである。内部における基本的層序は、黒色有機質粘土層が厚く堆積する下に、灰色粘土層が続き、やがて砂層に漸次移り、これを底としている。これの中には数多くの土器や木器はもちろんのこと石器、銅鐵などとともに多くの自然木、木材などが流れ込んでいた。特に土器の完形品や多くの破片は汀線近くに集中しており、なかでも12・13・15溝の流入口付近において著しかった。しかしここにおいても古墳時代前期より年代的に下降する土器は認められなかった。そのためこの中より出土した整美な銅鐵（図版13の上）などの年代に興味が持たれる。

条里制遺構 長浜地方は坂田郡条里による地割が、現在においてもなお比較的良好な状態で残されており、今までそうした研究も進んでいる地域の一つであると言える。現在までの条里制研究によれば、当遺跡の所在する字南寺田、下加茂田付近は坂田郡条里の9



地割り畦の一部

条7里に想定されており、この発掘地域の東隣に南流する小溝は7里と6里的境に当たると考えられている。そしてさらにこの調査地域はそれの2・3坪に相当することもすでに明らかにされているが、今回の発掘調査によってこの3坪の畦割りの一部が確認された。これらは約0.8mの間隔でもって東西に施され、かつては半折田であったことが明らかとなつた。もっともこれらは現在における田甫の境畦とほぼ一致しており、今日なお条里制による畦割りが旧態に近い状態で受け継がれているといえる。なお、それぞれの畦は、現在の畦の下にレンズ状に残されている。それらは弥生式土器および土師器の小破片が非常に多く混在する土によってかためられていた。そしてこれらは上記沼沢地の黒色有機質粘土層の上にも施されていることから、沼沢地とこれの相対関係が明らかであった。

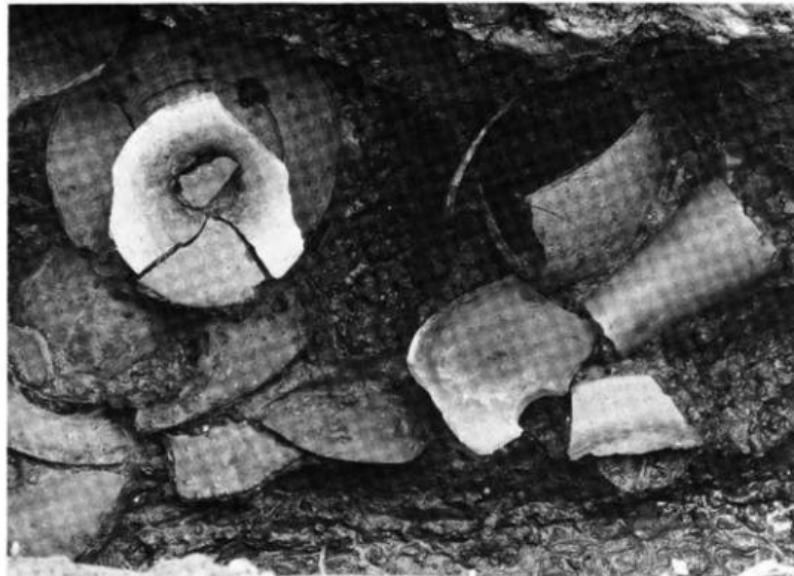
以上の各遺構の外に、8・12構によって囲まれた地域において小ピット群が確認された。これの一部が条里畦の上から施されていたり、またその配置に規則性が看取されないため、これらの性格については明らかでない。

## 遺 物

今回の発掘調査によって発見された遺物としては、弥生式土器、古式土師器、石器、木器などがその主なものであるが、これらの他に銅鏡、獸骨角、木の実などの自然遺物も若干検出された。そこでつぎにこれらのうち主要なもののだけを個々に取り上げ、説明するものであるが、紙数の都合とともに、遺物類の整理が未だ初段階にある現況では、それらの概要を記すにとどめておきたい。そして大辰巳遺跡の遺物など他の資料類との比較・検討は、後日刊行予定の報告書にゆずりたい。

### 1) 土 器

先に何回も記したとおり、弥生式時代中期から古墳時代前期までの土器が大多数を占め、須恵器が3溝等から僅か出土した以外は、すべて上記時代に属する。そしてそれらは器種に富み、形態などに注目すべき点も少なくなく、湖北地方においては、隣接する衆知の大辰巳遺跡の土器群以上に資料的価値の高いものと思料される。特に『手培り形土器』の発見は滋賀県下において最初であり、注目されるものである。



土 器 の 出 土 状 態

〔壺形土器〕 図版1の1は、器高23.5cm、口径11.6cm、胴径20.0cmを測る非常に均整のとれた壺で、外反する口縁は、その内側先端がやや直立する。そして口縁外側に波状文が繞らされ、頸部から胴部上半位に櫛による波状文、平行線文が交互に配されている。そして胴部下位には上記施文具によると思われる不規則な沈線が刷毛目様に施されている。これは3溝より横倒しになった状態で発見されたが、砂層にくい込んでいた部分にはこうした文様が比較的良く残されている反面、砂層より露出していた部分は、流水のためか、その文様が摩滅していた。なおこれの下腹部には全体に煤の付着が著しい。

図版1の6は大形の壺で、高さ46.7cmを測る。このタイプの土器は、湖北地方には比較的普遍的なもので、伊香郡西浅井町においても類似のものが発見されている。直径20.6cmを測る口縁部はほぼ直立し、その外面には2条の凹線文をめぐらしている。また頸部と胴部の境には薄い紐帯を貼り付け、そこに櫛先による列点文が施されている。なお縦長の胴部には、ほぼ全面にわたって粗い刷毛目が配されている。これには煤の付着は認められない。1溝内より出土した。



土器の出土状態



土器の出土状態

図版1の4は器高26.1cm、口径13.9cm、胴径22.9cmを計り、同図版の1と同様に非常に整美で、焼成の良い壺である。ゆるやかなカーブで外反する口縁端部の全周約4分の1には、刻目が施されている。また最大径を下位部にもつ胴部には、部分的にかすかに刷毛目痕が認められるが、全体的にヘラにより美しく仕上げられている。なおこれは旧沼沢の底底部から発見された。

図版2の4は12溝より発見されたが、器高22.7cmの割りには胴径が大きく、23.1cmを測る。口縁部は先端で内曲するが、その外面および胴部の上位置に列点が施文されている。また胴部の最上位には櫛描文が水平にめぐらされている。これは平底をもつが、この底部が突出しているのが特徴である。

〔菱形土器〕 この種の土器には平底のものと丸底のもの、および台付きのものの3種が認められる。図版2の5は28.4cmの高さを有するが、くの字状に外出する口縁端部には刻目文が配されている。そしてこれのすぐ下の部分から胴部の中位部下まで叩き目が顯著に残されていて、これの上から刷毛目が線状に配置されている。しかし刷毛目痕は胴部中



土器の出土状態

位から底部にかけて方向に統一性を欠くが、底部位ではほぼ垂直に施されている。また口辺部内側にも刷毛目様のものが認められるし、さらに底部にも粗い刷毛目が残されている。

1号より出土。全面にわたって煤が厚く付着している。

図版2の7は台付の壺形上器であるが、この種のものは鶴田遺跡においてめずらしくない。28.7cmの高さを有するこの土器は胴部の全域に刷毛目がほぼ垂直に施されている。口頭部は上半位が内彎し、その端部はゆるやかな段状を呈している。これは全体的にきわめて薄く造られ、口頭部・台部および底位部がやや肥厚する程度である。

図版2の6は丸底を呈し、胴部も球形に近い形態をもつ。これの口頭部は同図の7のように内彎するが、それは下位部を除いてほぼ直状を呈する。これも非常に薄く造られているが、胴部全面にわたって刷毛目が残されている。なお6・7ともに外面に煤の付着が著しい。

図版2の1は比較的小形のもので、器高18.8cm、口径13.5cm、胴径14.4cmを計る。これは上記3点と異って、口頭部から胴部にかけてのカーブがなめらかで、同図の2とともに

形態に差が認められ、特に口縁端部が内側に立ち上っているのが特徴であり、さらに口縁部外面および胴の上位部に櫛による列点文・波状文・平行線文が施されていることも前記の3点と異なる。この2点にも外面に煤の付着が著しく、また薄造りである。なおこれら2点ともに2溝から出土したものである。同図の4とこれら2点は口縁部の形態、文様などに共通性が認められ、ほぼ同時代のものと考えられる。

#### 〔手培り形土器〕

滋賀県下で最初の手培り形土器である図版3の1は、器高18.0cm、器幅17.0cmを測ることができる。これら焼成および造作は決して良好とは言えないが、胴部の外面に限って見るならば、ヘラ削りの痕が整美であるのは注目される。しかし屋部外面は刷毛目の痕が不規則に、無造作に施されていたり、底部なども粗雑に仕上げられていて、凹凸が著しい。胴部と底部の境は若干突出しており、そこに刻目が配されている。また他府県における例と同様に、屋部外面は赤く焼けており、内側より高熱を受けたと考えられる痕跡が顕著であり、さらに内側には煤の付着が認められる。これは沼沢地内より出土した。



土器の出土状態

〔高杯形土器・器台形土器〕

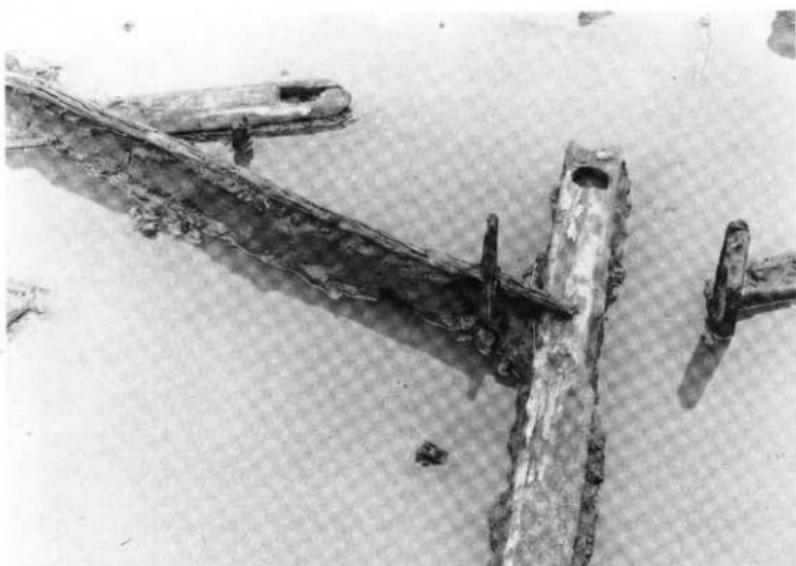
この両種の土器は、他の形態のもの以上に數多い。図版3の4は、器高18cm、口径16cmを測るが、胎土には砂の混在が著しく、焼成・造作ともに比較的粗い。これは沼沢地より発見された。一方器台形土器の内、図版3の10にみられるタイプが最も多い。これは焼成が軟弱で、何らの装飾的意匠も見られず、実用本位のものと思われる。これは高さ15.2cm幅19.0cmを測る。器の外面には刷毛目、ヘラ削りなどの痕は認められないが、これは焼成が軟弱なために、すでに磨滅しているものと思わたる。これは12溝より発見された。一方同図の6・7はきわめて小形のものであるが胎土・焼成・造作は良く、外面はヘラで整形した痕が美しい。前者は7溝より、後者は旧沼沢地より発見された。同図の12も7溝より出土したものであるが、これは口縁部が肥厚し、外面に細い沈線が配されている。これは上記3点と比べて若干年代的にさかのぼるのであろう。

〔そ の 他〕

以上の外に瓶形土器や小形丸底壺などが多い。図版3の11は焼成、胎土、造作ともに同



解説の出土状態



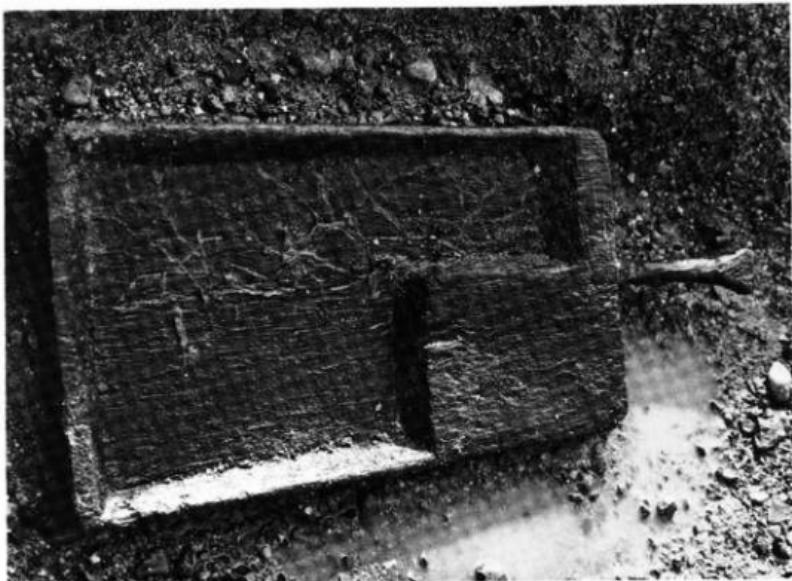
はぞ穴のある木材

図の10の器台形土器に酷似しており、近時性の強いものと考えられる。これは口径20.0cm、器高11.4cmを測る。外面は粗い刷毛目痕が局部的に残されている。これも12溝から発見された。一方小形丸底壺の數も多い。これらの多くは旧沼沢地内より発見されたが、7溝から出土したものも少なくない。これらの主なものだけを図版4に一括しておいたが、これらは口頭部などの形態に規則性等があまり看取されず、また焼成もまちまちであり、時代と形態等の相関性については後日の報告書に譲りたい。

以上が土器についての概略であるが、これらの他に図版4の7～9等にみられる土器類の存在が注目される。これらは口頭部が長く、また底が小さな平底状を呈し、それが指先で内に押し入れた状態にある点が共通し、また器の外面がヘラで美しく研磨されているのが特徴である。ただ図版4の8は平底状を呈さないが、これも含めて図版3の2および5などとともに近時性の強いものと思われる。

## 2) 石器・木器・その他

石器類の種類もまた少くない。石斧の類としては太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、柱状



盤の出土状態

挿入石斧をはじめ整形石器も数点発見されている。また石鎌も打製のものはもちろんのこと、磨製石鎌も少なくない。図版4の下はそれらのうち特に整美なものだけを取り上げたが、この図の6の磨製石鎌は特に優品である。またこれらの他に同図の1および2にみられるおり打製の石槍、石鉗(?)もあり、さらには硬玉製勾玉、碧玉製管玉、砂岩製の三輪玉(?)等がある。また土製丸玉(図版14の下)の存在も注目される。

一方、木製品としては、用途不明のものが多い。しかし図版15にある木製の大刀は線刻の装飾が施されており、これは祭祀的な形代とも考えられる。また同図の盤(?)は平面の四分の1が削り残されており、細い柄をもっているのが特徴である。またほぞ穴をもつ木材がかなり発見され興味をもたせる。

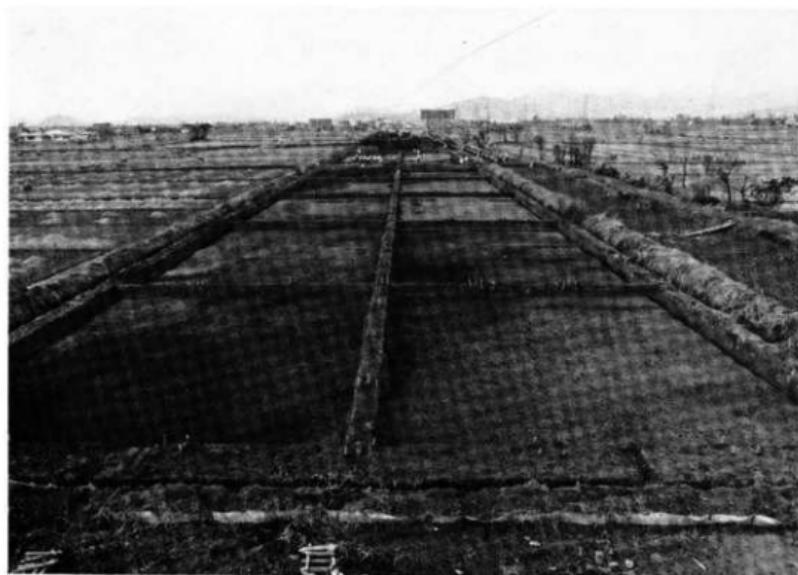
以上の他に図版15にある獸角製の加工品や、銅鏡等が発見され、色々な意味で傾注すべきものであるが、紙数の都合上、それらを詳しく説明することができないので、後日の報告書にゆずりたい。

## む　す　び

湖北地方は、初めにも少し触れたように、古墳時代に先進的地域として非常に注目されるところであったが、こうした基盤は弥生式時代においてすでに形成されていたことが、今回の鴨田遺跡の発掘調査によって明らかとなった。今日までこの地方における弥生式時代の遺跡としては、同じ長浜市内の大辰巳遺跡のみが傾注されていたが、これにほぼ隣接する当鴨田遺跡は、大辰巳遺跡以上の規模を有するものであることが推考され、この両遺跡の存在は、弥生式時代から古墳時代にかけての当地方の繁栄を裏付けるものであるとともに、当地方に多い大型古墳群の存在を理由とするものとして重要である。

ただ今回の鴨田遺跡の発掘調査においては、住居址、墓などの人間の生活と直接関係する遺構の発見に恵まれなかったため、当遺跡の性格の決定を将来に待たなければならぬが、この遺跡が姉川の氾濫原上に在るため、既にそうした遺構の類が削平され、消滅している可能性が頗る大きいのが気になるしだいである。

今回の発掘調査は昭和46年6月から翌47年3月までの10ヶ月間を費して実施しているも



発掘調査の状況

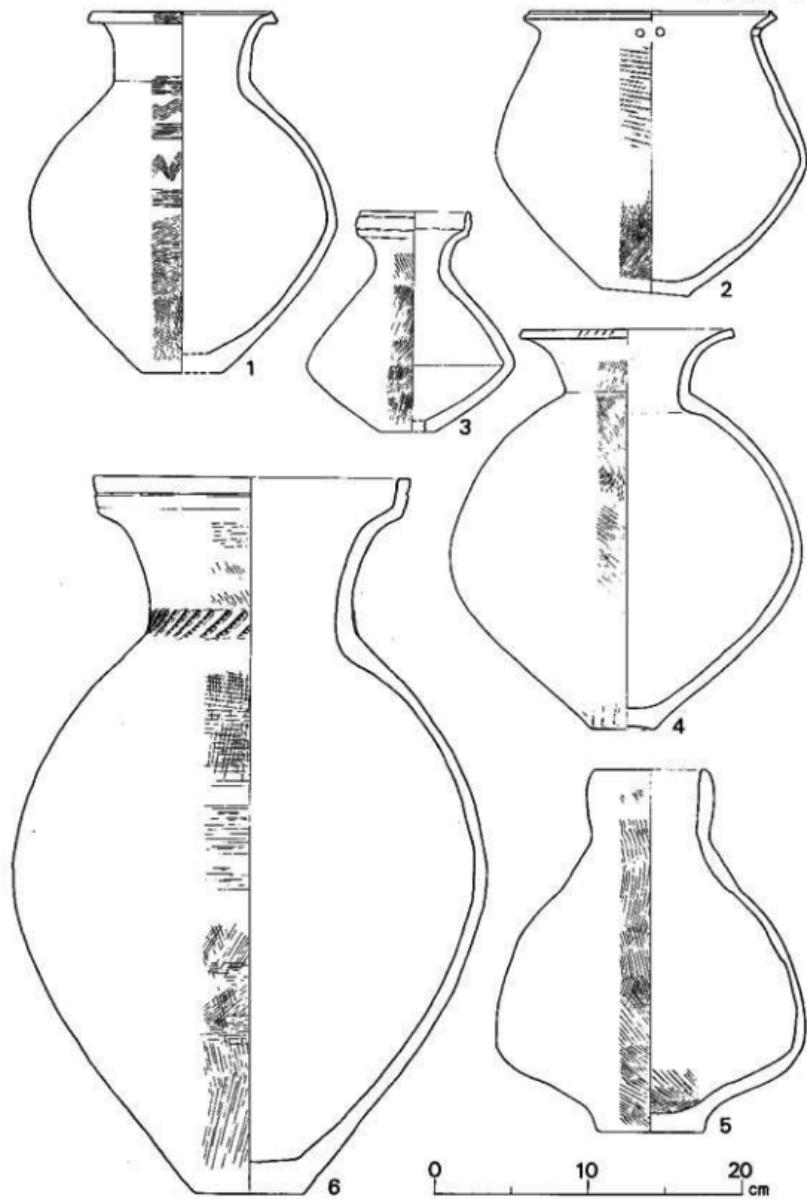
のであるが、この概報は昭和47年1月末日現在における成果を概説したものであって、これ以後2ヶ月間の調査結果を待たずに刊行のはこびとなった。そのため最終的な成果および所見は近く刊行予定の報告書にゆずらなければならない。

今冬は例年と違って、湖北地方には積雪がなく、発掘調査には好都合であったが、それでも寒風が肌を刺し、時雨の多いこの地方独特の天候は調査関係者をふるえあがらせ、調査の進行に多くの支障を与えた。こうした悪条件の下で調査に協力下された調査員、調査補助員、作業員の方々、ならびに関係各位に深甚なる謝意を表したい。

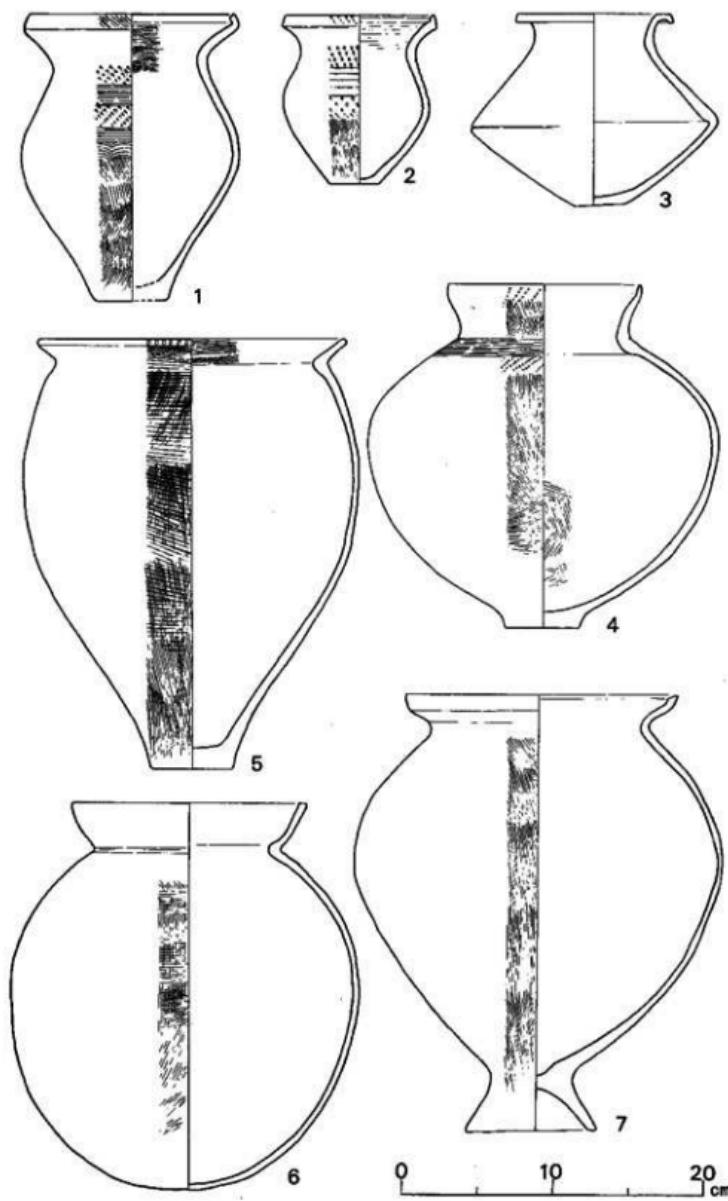


清水路と伊吹山

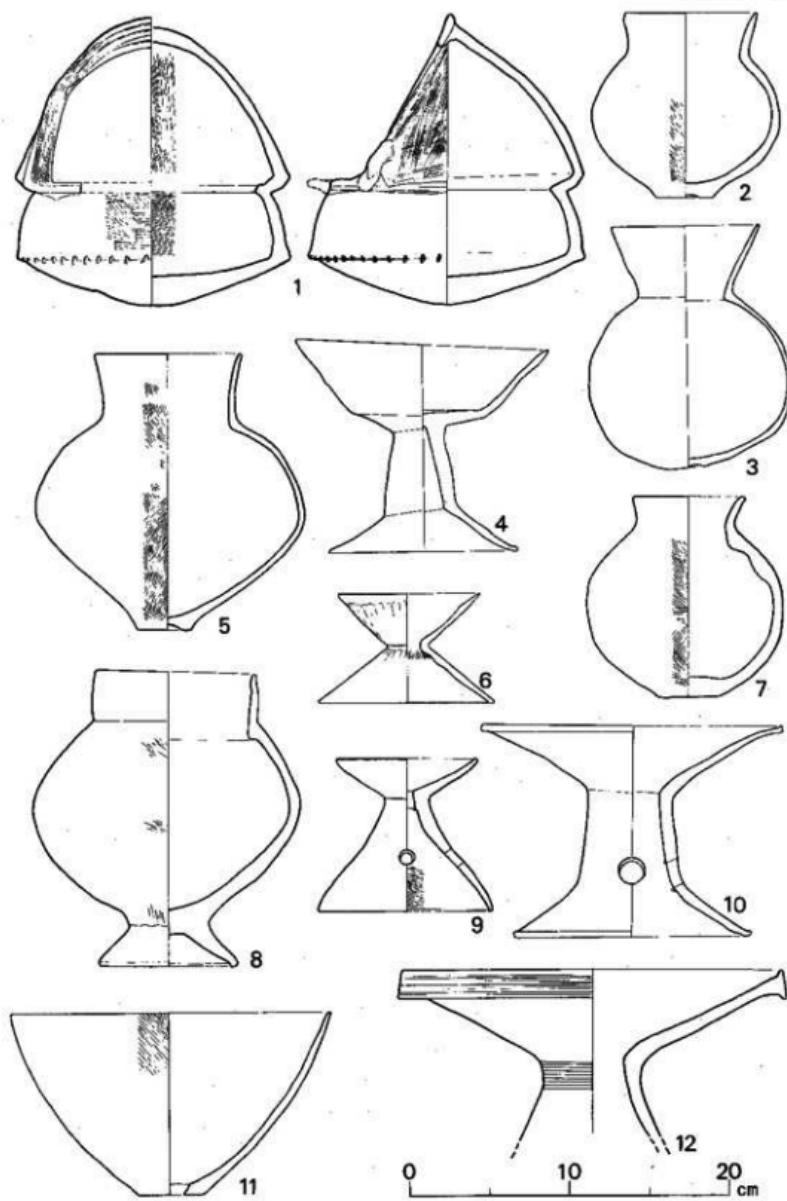
図版 1



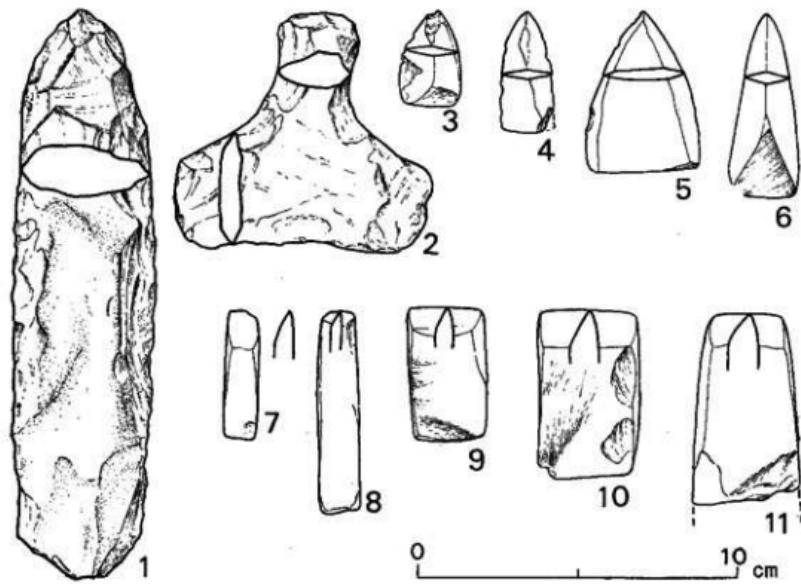
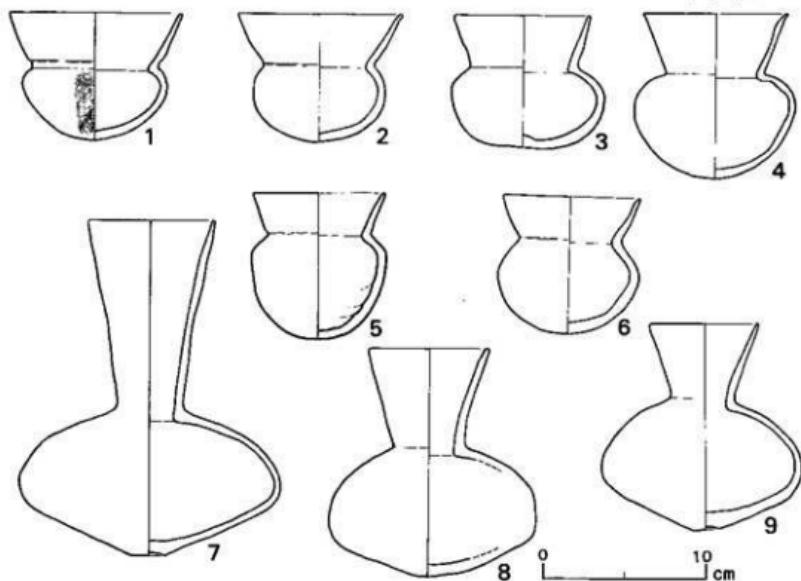
図版 2



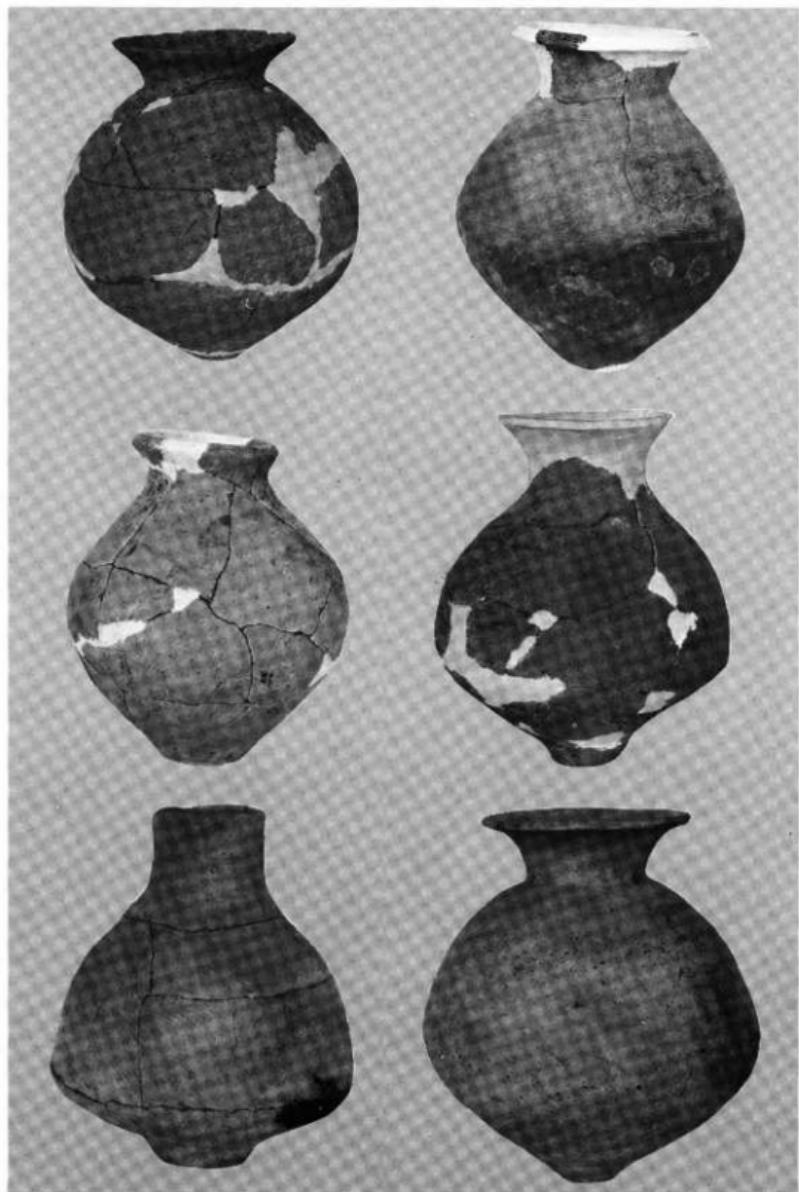
図版 3



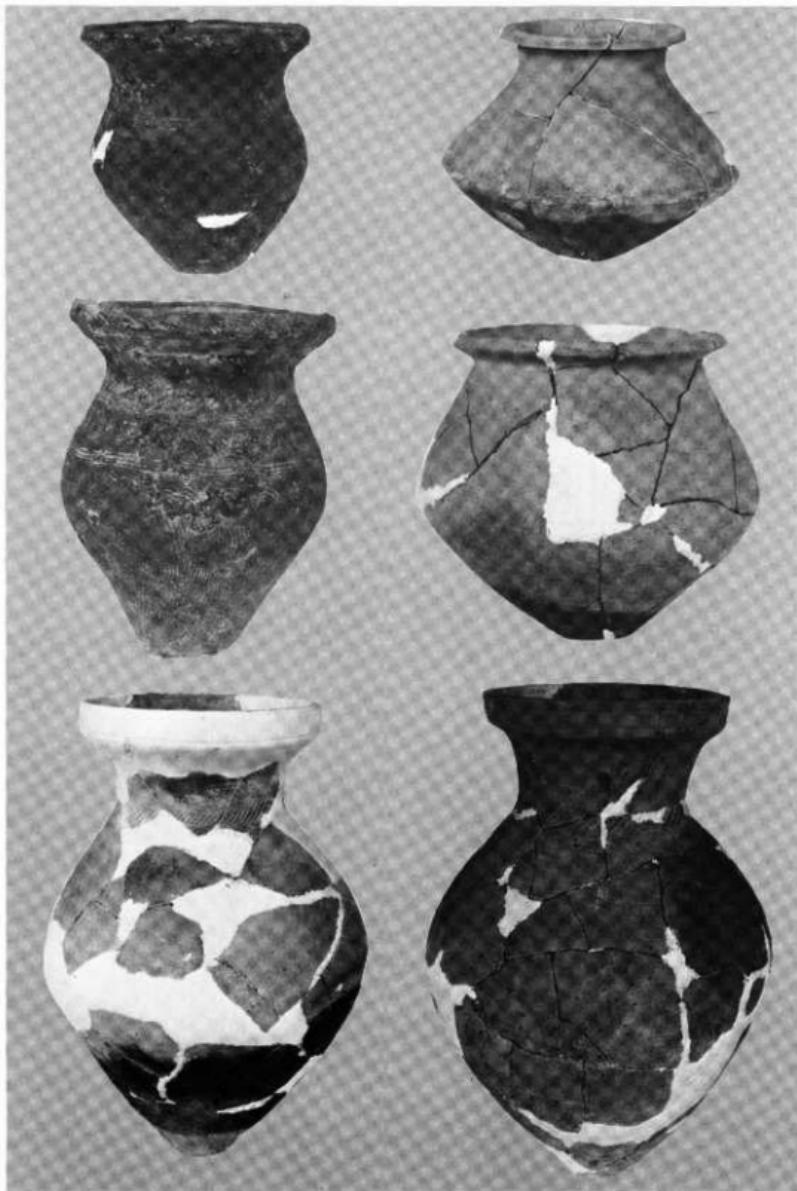
図版 4



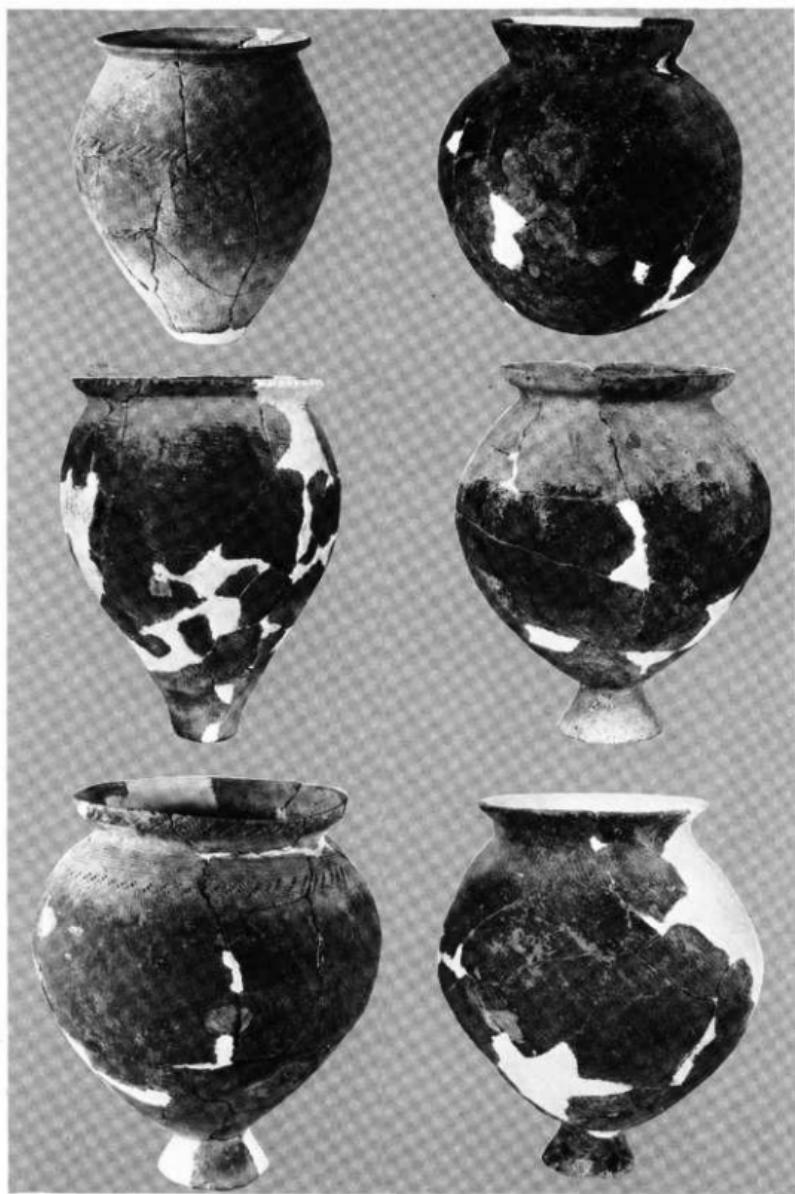
図版 5



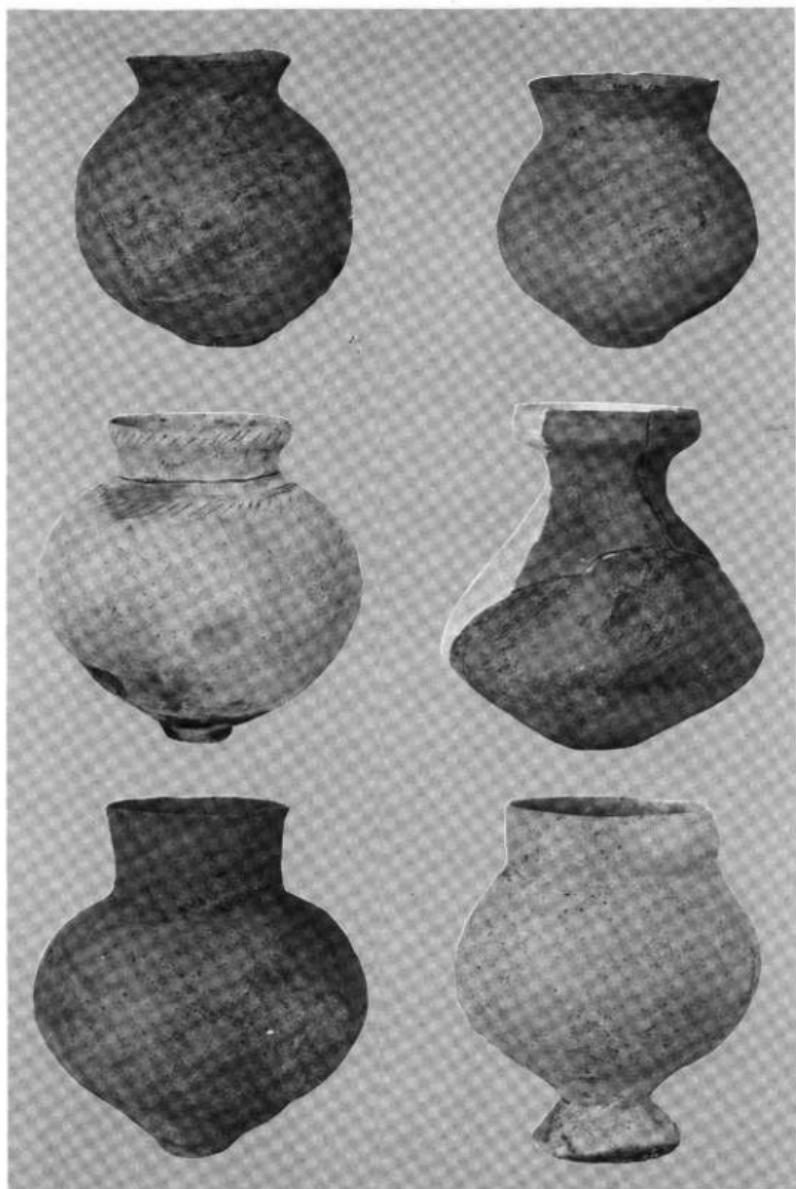
図版 6



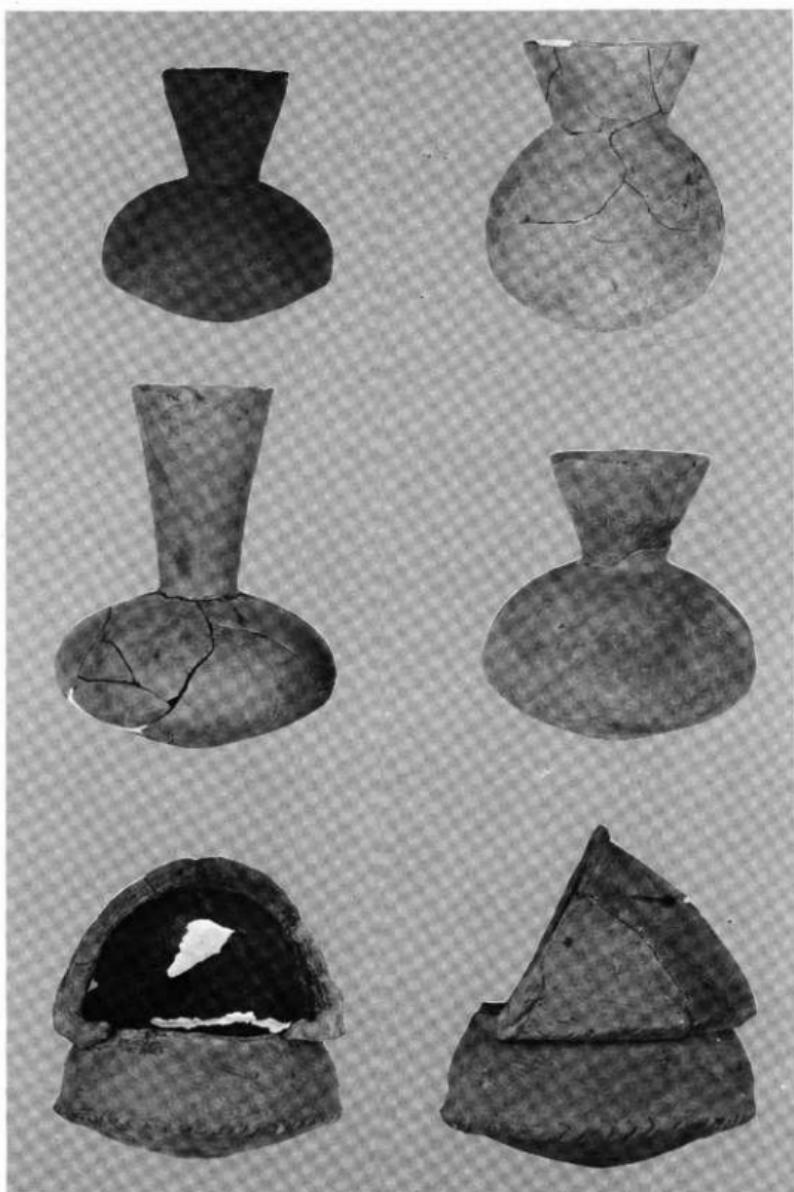
図版 7



図版 8



図版 9



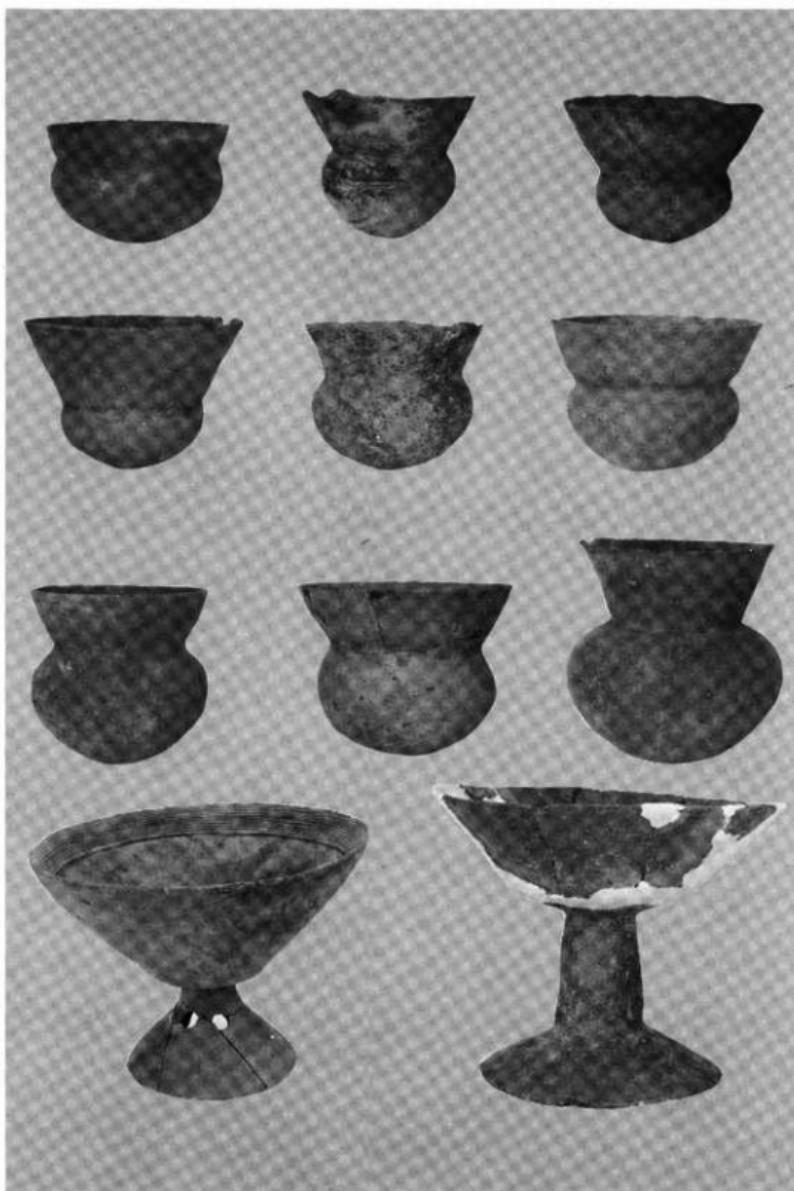
図版 10



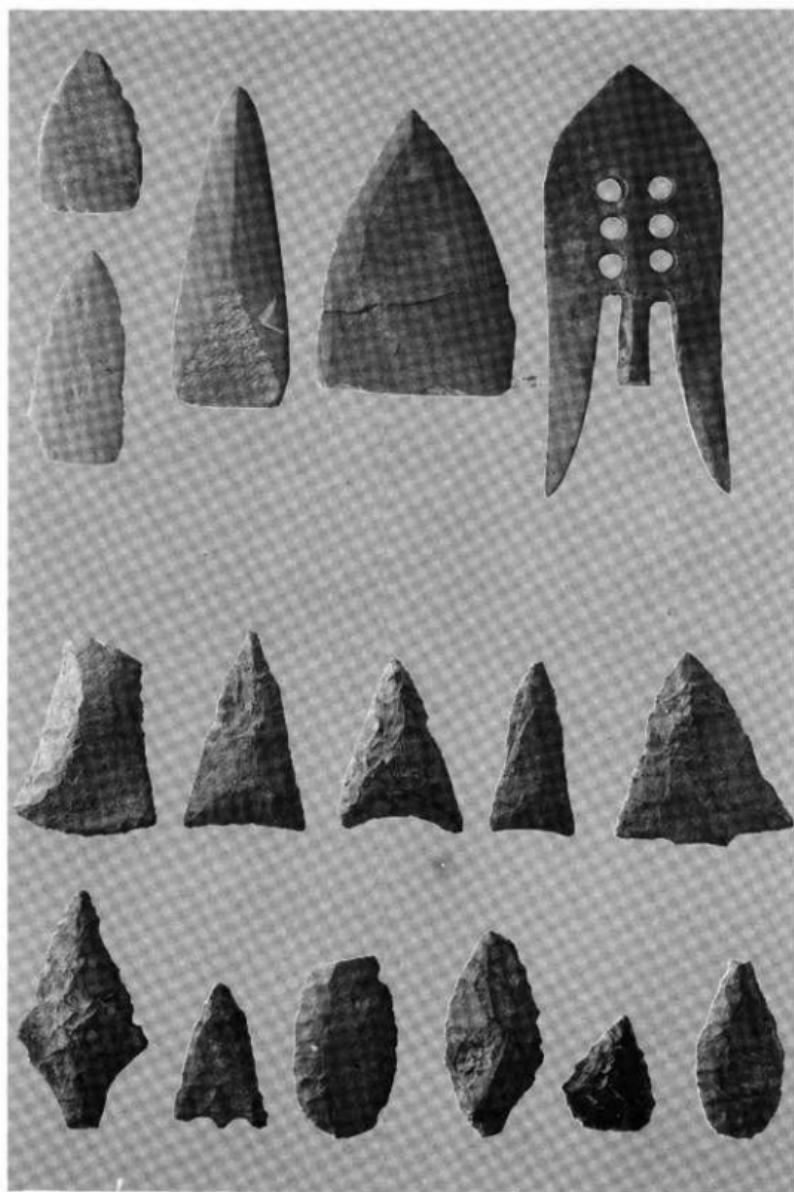
図版 11



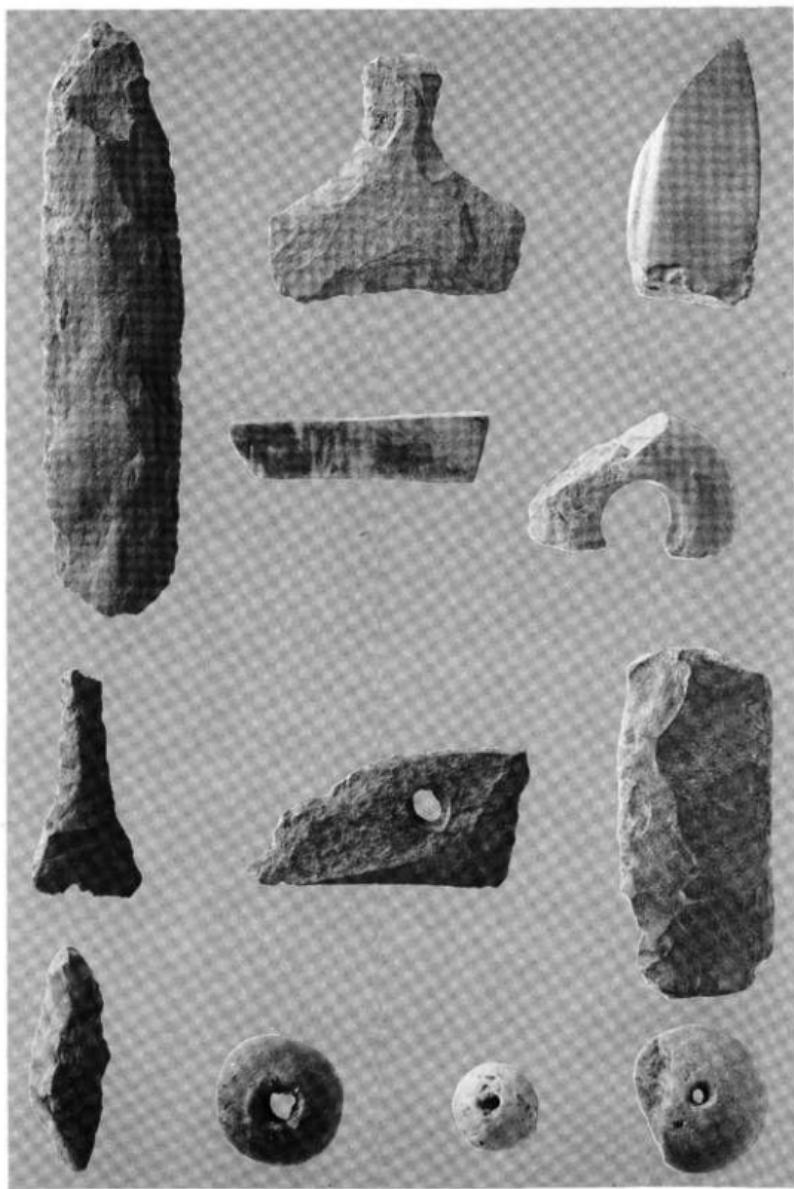
図版 12



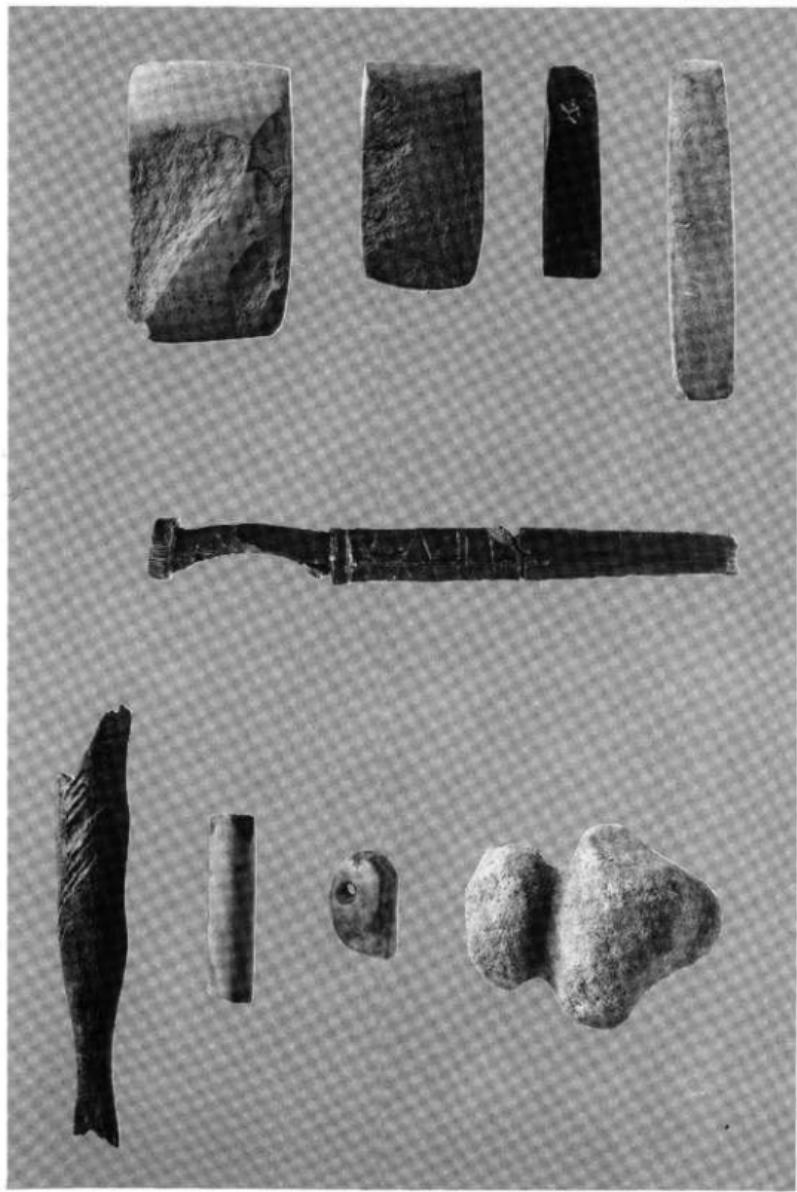
図版 13



図版 14



図版 15



昭和47年3月20日 印刷

昭和47年3月30日 発行

### 長浜市鴨田遺跡発掘調査概要

編集 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課

発行 滋賀県教育委員会

印刷 明文舎印刷商事株式会社